

## 現代における「憑依」について考える

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科 村 澤 和多里

筆者は心理療法あるいは精神療法について、治療文化論あるいは医療人類学の視点から関心を持って研究してきた。本稿ではそのような視点から、「憑依」という現象について、個人的な体験も参照にしつつ若干の考察を行いたい。

### 1. 風の電話

東日本大震災から10年ほど経った冬のある日、岩手県の三陸海岸の南側、大槌町にある「風の電話」と呼ばれる電話ボックスを訪ねていった。吹雪の翌日だったので、大槌町は真っ白な雪で覆われていた。海に近いところには真新しい建物が並んでいたが、少し登ると古い街並みが帰ってきた。

「風の電話」は少し高台にある解放的な公園のなかにあった。門から電話ボックスまでの道には雪が積もっていて、まっさらな雪にキツネが横切った足跡があるだけだった。少し進むと鉄製のアーチがあり、その向こう側に真っ白な電話ボックスが設置されているのが見えた。

アーチをくぐる時、つるさされている鐘を鳴らすと思いのほか大きく響きわたった。電話ボックスの扉を開くと、ガラス張りの明るい空間のなかに黒い電話とノートが置いてあった。なかは陽射しのためにほのかに暖かく、外界とは異なる静寂な空気に包まれており、電話線の端はどこにも接続されていなかった。

私は受話器を手にとり、右手の人差し指でダイヤルを回した。ダイヤルを回すということ自体、数十年ぶりのことであった。どこにかけるということをはっきり決めないでしたが、自然にある電話番号をダイヤルしていた。回したダイヤルはゆっくりと元の位置に戻った。それを繰り返すうちに私のなかの時間も過去に戻っていくように思われた。

ダイヤルを終えてから、しばらくそのまま待つ

ていた。もちろん誰も応えるものはいなかったが、受話器の向こう側に何もなかったわけではなかった。圧迫感にも似た密度の濃い沈黙があった。真っ白な空間の中で沈黙の時間がすぎていき、私は意を決して話しかけることにした。それからさまざまな思いが溢れ出した。

### 2. 被災地の幽霊

「風の電話」は、もともとは岩手県の大槌町の庭師の佐々木格氏が、死去した従兄と話をするために、自宅の庭の隅に設置した電話ボックスであった(佐々木格, 2017)。設置した翌年の3月11日、大槌町の海岸に隣接する地域は大地震による大津波によって決定的な被害を受けた。これを受けて佐々木氏は、敷地を整備し、遺族が亡くなった人たちと話ができる場として電話ボックスを解放したのだという。「風の電話」には、いまでも亡くなった人たちと話をするために多くの人が訪れている。

大震災の後、亡くなった人ともう一度話がしたい、そんな思いが被災地には満ちていた。筆者も、東日本大震災の後に被災者支援にはいった人から次のような話を聞いたことがある。その人はある高齢の女性から、「おじいさんが帰ってこないのはわかっている。でも、津波で流された家の跡に、仏壇が埋まっていないか探して欲しい」と頼まれたそうである。幸運にも仏壇は見つかり、女性は「これでおじいさんとお話ができる」と涙したのだという。

また、工藤（2016）は石巻と気仙沼のタクシー運転手などに調査を行い、震災後に幽霊との遭遇が多く経験されていたことを明らかにしている。深夜にタクシーに乗ってきた女性に、運転手がその目的地は津波で何もなくなっていると伝えると、泣き声とともに消えていなくなってしまうという話などである。この話では、女性は自分が亡くなっていることに気づかずさまよっていると思われる、当時の被災地では霊と交信することはリアリティを持っていたのであろう。

### 3. 霊との断絶

近世以前の日本では、死者の霊と交信するという風習はそれほど特殊なものではなかった。現在ではこのような風習は衰退しているが、それでも津軽地方においては「イタコ」や「オガミサマ」、「ワカドノ」といわれる盲目の巫女が死者や先祖の霊をその身に憑依させて、その思いを語らせるという、「口寄せ」という風習が今もわずかながら続けられている。民俗学者の川村邦光はこういった東北の巫女たちを調査し、彼女たちの行ってきたことを「吊い」という文脈で捉えている（川村, 1997, 2015）。

この盲目の巫女たちは、子どもの頃に師匠の元に弟子入りして厳しい修行を積み、やがて神を憑依させるイニシエーションを経て、一人前の巫女となっていく。彼女たちが営みを行う民俗文化内においては、「口寄せ」は死者の世界と正者の世界とを結ぶ儀式であり、川村によると“ここで大切なことは、生者が死者の声を聴くという心構え、あるいは聴くことができるという信心”（川村, 2015）であるという。

この世に生きる者たちは、葬儀の後も定期的に巫女の「口寄せ」を通して先に亡くなった者たちと対話し、「吊う」ことでこの世とあの世の両方に秩序をもたらすのである。

このような「吊い」の形式は、現代を生きる私たちにわかに理解しにくいところがあるかも知れない。川村（2015）は私たちの理解を助けるために、1996年に東北地方で購読されている河北新報に掲載された「霊界結婚式」という印象的な記事を紹介している。それは中学生の息子を亡く

した母親が、その十三回忌に、霊界にいる息子が一人で寂しくないように、お寺で「結婚式」を行ったというものである。その母親自身も実際に「結婚式」をとりおこなうまでリアリティを感じていなかったようであるが、住職に息子の名前と結婚相手の女性の名前を聞かれ、あわてて「成子」という名前を考えて告げた次の瞬間には、「成子さん、息子を頼みます。これからは二人で仲良く暮らしてください」と思わず口にしていただという。そして「結婚式」を無事に終えた頃には「私の務めは終わった」という気持ちで涙が止まらなくなったのだという。

そのほか川村は、青森県津軽地方には花嫁や花婿人形の奉納という風習、山形県の「ムサカリ絵馬」という結婚式の光景を描いた絵馬を寺に納めるという風習を紹介している。これらもまた未婚のまま亡くなっていった人々の霊を供養するためのものである。川村はこれらの供養について“死者と交渉する営みであり、生者による吊いの形としてあらためて見直してみてもいいのではなかろうか”（川村, 2015）と述べている。

大震災から10年以上が経過し、東北地方の神社では「ムサカリ絵馬」の奉納も増えている。親しい人の死や突然の災害は、人々の心に大きな傷を残す。それはいわば意味の真空地帯であり、突然に打ち切られたドラマのように結末を求めて止まない。事件を忘れることによってはこの傷を癒すことはできない。

### 4. 「憑依」する心身

精神医学史を研究者である兵頭（2007）は、近代化によって、それまであった〈憑く心身〉の世界観が現在私たちのものである〈病む心身〉の世界観へと変貌していったという。〈憑く心身〉の世界観においては、心の問題は共同体に共有された観念の問題となり、しばしば「憑かれる」ことは一過的な現象として理解され、そこで行われていた「祓魔術（憑きもの落とし）」は悪霊を退治するという色彩よりも、その土地に居残っている霊的な存在とうまく「おつきあい」をして行く作法といった側面が強かった。それが近代化とともに〈憑く心身〉の世界観が衰退し、精神医学を中

心とする〈病む心身〉の世界観へと移行して行った。

「憑依」を中心にした作法においては〈憑く心身〉の持ち主が必須であるが、そもそもそのような心身を自覚的に生きている人がほとんどいなくなってしまう。例えば、口寄せによる「憑霊」が可能になるのは、巫女たちが、苦しい修行を体験した上で、〈憑く心身〉を手に入れたためである。誰もが憑依される心身を手に入れることができるわけではなく、長年の修行ののちに断念せざるを得ない場合もあるという。

憑依されている間のことは、本人に意識されないことが多く、言動や振る舞いを自分でコントロールできない状態にある。いわゆる「自己喪失」とか「変性意識（トランス）状態」と呼ばれる状態になる。

一所懸命、願ひするんです。そうすつと、お降りになられるんです。心はね、何だかさっぱりわかんなくなるの。カミサマ、お呼びして、拝んでいるときはわかります。だけど、カミサマ、お降りになったとき、自分の気持ちはこう夢見た様なんだわね、何にも映んなくなって…（中略）…自分の胸のどこ、苦しくなって、自分がべらべらとしゃべるわけなんです。それは覚えてるつうわけにはいかないんです。…（川村邦光1997, p146）

## 5. 憑依, 解離, 嗜癖

このような憑依の風俗は、日本においては近代化によって衰退していったと考えられるが、大宮司（2014）によると、精神医学関連論雑誌において「憑依」に関する論文は1960年代から論文数が増加し、近年でも一定数発表されているという。

しかし注目すべきことは、大宮司（2014）によると、近年の動向として「憑依」と近縁の現象である「解離」についての論文が急増していることである。DSM-5において「解離症群」は、“意識、記憶、同一性、情動、知覚、身体表象、運動制御、行動の正常な統合における破綻および/または不連続である”（American Psychiatric Association, 2013）と定義されている。大宮司は、「解離」と「憑

依」とは変性意識状態という点が通底していると指摘し、「解離」についての論文の急増は“変性意識状態を基盤とする病理の表現形態が憑依から解離へと変化しつつあることを示唆するのかもしれない”と指摘している。

「解離」に注目すると、2000年代に入ってから急増している自傷行為（リストカット）との関連性も考慮に入れられる。筆者らはこれまで日本で発表された学術論文から「自傷」「リストカット」を検索語として抽出した論文を整理し、青年期の非致死性の自傷行為（リストカットなど）に関する論文が2003年から急増していることを確認している（村澤・松川, 2022）。

松本（2011）は自傷行為と「解離」「摂食障害」「物質依存」との関連性を指摘しており、自傷行為自体も嗜癖の一種であることも指摘している。松本によると、自傷行為は道具を用いた意図的な自己治療のための技法であり、しばしば「解離」ともなうことがある。また、アルコールや薬物などへの嗜癖も、やはり変性意識状態を引き起こすために物質を用いる技法であり、「解離」と関係していると理解することができる。実は、これらは伝統的にシャーマンが変性意識状態に移行する際に用いてきた技法と共通するものである。

つまり、「憑依」「解離」「嗜癖」は関連した現象であると理解することができる。思い切っている、例えば、「憑依」も「嗜癖」も、「解離」（変容意識状態）を引き起こすための儀式という側面から理解できるということである。自傷行為は、個人の水準に切り詰められた意識変容のための儀式といえるかもしれない。

## 6. 「憑依」の二つの極

もうひとつ、私がかねてより「当事者研究」と「憑依」との類似性について指摘してきた（村澤, 2021）。よく知られているように「べてるの家」の当事者研究では、幻聴を「幻聴さん」と呼んだり、ある症状にとらわれてしまうことを「お客さん」などと呼んだりして、精神症状をその人の属性から切り離すような「外在化」と呼ばれる技法が用いられている。これは呪術師が何が憑いているのかを名指すことと似ており、また「お客さん」

を外在化し、それとの付き合い方をみんなで考えるというのも、「狐落とし」などでの憑依霊とのかけひきを思い起こさせる。

このように考えると、リストカットなどの「解離」をともなう嗜癖行動が現代の「憑依」のひとつの極だとすると、その対極に「当事者研究」を置くことができるかも知れない。前者は、近代的自我を極限まで高めていく方向に行くのに対して、後者は脱近代的自我を志向するといえる。一部の嗜癖行動は、道具（カッター、薬物など）を用いて変性意識状態（解離）を生じさせることによって、他者と関わることなく自己治癒力を獲得しているが、状況そのものを変えることができないので本質的な治癒には至らない。しかし「当事者研究」においては、一種の「憑依」のような現象を意図的に作り出していくことで、行き詰まった社会状況を再編成する機会を作り出している可能性がある。

本稿は、あくまでも筆者の感想の域を出ないが、今後思索を深めていきたい。

## 文 献

- American Psychiatric Association (2013) : *DSM-5 Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fifth edition* United States, American Psychiatric Publishing. (日本精神神経学会監修 (2014) : DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院.)
- 大宮司信 (2014) : 日本における憑依研究の側面—精神医学の視点から 北翔大学北方圏学術情報センター年報, 6, 1-6.
- 兵頭晶子 (2008) : 精神病の日本近代—憑く心身から病む心身へ 青弓社.
- 川村邦光 (1997) : 憑依の視座 (巫女の民俗学Ⅱ) 青弓社.
- 川村邦光 (2015) : 吊いの文化史—日本人の鎮魂の形 中公新書.
- 工藤優花 (2016) : 死者たちが通う街：タクシードライバーの幽霊現象 東北学院大学震災の記録プロジェクト金菱清 (ゼミナール) (編) 呼び覚まされる霊性の震災学—3・11生と死のはざままで 新曜社 pp.1-24.

松本俊彦 (2011) : アディクションとしての自傷 —「故意に自分の健康を害する」行動の精神病理 星和書店.

村澤和多里 (2021) : 「当事者研究」と生命のリズム (後編) —「憑きもの」から「個人症候群」へ 精神看護, 24, 442-449.

村澤和多里・松川愛美 (2022) : 日本における「自傷行為」概念の認識枠組みの変遷について—CiNii Articlesを用いた文献調査から 全国障害者問題研究会北海道支部会報, 231, 17-32.

佐々木格 (2017) : 風の電話—大震災から6年、風の電話を通して見えること 風間書房.